

【佳作】

才なき者よ

理学部 化学科4年 吉永悠希

剣を手取る。それは容易いことではない。重く、堅く、鋭い、鉄の塊である。なぜならそれは人を殺す道具なのだから。

剣は女子供が持つようなものではない。男だからと持てるものではない。なぜならそれは人を殺す道具なのだから。

剣を手にすることは名誉である。それは選ばれたものにしかできない。誰かを、何かを護りたいと思ひ、研鑽を重ね、そうしてようやく剣を握ることが出来る。なぜならそれは人を殺す道具なのだから。

人を殺す道具なのだから、その覚悟のない者には剣は振るえない。

人を殺すということは、己も殺されるかもしれないということだ。根源に近い恐怖、あるいは本能と、そう呼ばれる思考に抗うことは誰にでもできるものではない。人を殺し、己が死ぬ覚悟というものができないことを何者にも誇られることも、またないのだ。

であるならば、私にその素質があるというのだろうか。

息を深く吸いこみ、ゆっくりと吐き出す。ほのかに暖かく、草花の香りのする心地の良い空気が肺を満たしてくれる。陽の光を薄い雲が和らげる空の下、私はそうして向き直る。まっすぐに、訓練用の木刀の切っ先が私を捉えている。私の向かいで木刀を握る少女の構えは悪くない。だが、緊張しすぎている。それでは……

「はじめ！」

その一声で空気がわずかに張り詰める。

「やああっ」

向い立つ少女は迷いなく距離を詰め、木刀を振り下ろしてくる。めいっばいの大振りだろうが、体躯の小ささ故にさした威力はないだろう。私の技量を以てすれば弾いてから返す刀を胸に振るうことは容易い。

ただ、その迷いのない瞳と目が合うことがなければ。私はその眼差しを忘れられるわけがないのだから。

名を、ベルク・ゴートンと言う。人は彼を孤高の隻眼と呼んだ。どこかの吟遊詩人がそう言ったのだそうだ。現騎士団における騎士団長であり、

最強の男。私の師であり、恩人であり、理想そのもの。

そして彼には娘がいる。彼女はアイリス・ゴートンといった。

アイリスの眼差しは、ベルクによく似ていた。構えも、剣筋も、師によく似ている。

彼女に師の気配を感じ取って、どうしても反応が鈍る。彼女の一撃を受け流し、次に来るものを受け流し、そしてその次を……

動きが鈍い。身体の問題ではなく、これは精神に由来するものか。私は未だにこの前のことを忘れられないのだろうか。

鉄の、いや血の匂いが鼻腔を侵す。誰かの呻き声と、鎧が擦れる音が絶え間なく聞こえてくる。

「ここは落ち着いたか、状況を」

「はいっ、負傷者の手当は向こうの方で、重体の者も多く——」

あたりを見回し、気が付く。騎士団長の、ベルクの姿が見えない。最強と謳われるように、彼の實力は本物である。それを疑っているわけではな

い、だが、妙な胸騒ぎがした。

「動ける班が残ってるな、私の後によこせ、欠けたところは戦線維持に当たらせろ、団長を追う」

「わ、わかりました」

「私は先に行く」

彼ならどのような苦境をもものともしないと信じていてなお、行かねばならないと思った。

そうして辿り着いた先で、ベルクを見た。彼の左腕が喰い千切られる所を私は見た。その光景に対する理解を拒む。最強である彼が、そんなはずはないと。彼の腕があつた場所から噴き出す鮮血を、認められなかった。

それでも身体は動く。剣を引き抜き、駆け出す。ベルクの腕を喰い千切つたのは、人の倍はあろう巨軀を持った異形の狼。猛猛で狡猾な存在だが、これまで見たどれよりも大きい。

まだベルクの息はある。何より彼がただやられるわけもない。刺し違え、異形の狼の腹を深々とベルクの剣が穿っていた。

手負いだ。今なら私がそいつにトドメを——私には無理だ。今踏み込めば、間違ひなく私はただでは済まない。まるで隙が見えない。

何より、その異形の狼もまた隻眼であつた。その潰れた眼がいつかの幼い私を今も睨んでいる。

私は躊躇した。己の命が惜しいからと、たったの一瞬、だが間違ひなくそこで運命が決した。

異形の狼はベルクの残る右腕を切り裂き、そして矢継ぎ早に彼の喉笛を噛み切った。

私は剣を握ったまま、その瞬間を見ていた。

アイリスの姿がベルクの姿を思い出させ、ベルクの姿が私を縛り付けている。

彼女の剣を右に弾く。

—あの時私が迷いなくベルクに駆け寄せれば今も彼は生きていたのだろうか。

彼女の剣を一步退いて躲す。

—私の剣技が未熟だつたのではない、私の覚悟が未熟だつたのだ。

彼女の剣を己の剣で受け止め、鏢迫り合う。

—剣を手にしながら、それを振るえるだけの才に恵まれながら、大切な人ひとり救えなかつた。

木刀を押し返し、彼女の身体ごとを押し飛ばす。相対するアイリスはもう既に息が上がっている。

それも当然か、未熟な剣の腕に加え、それを補うようために動きに無駄が大きい。何より、アイリスと私とは性別が違う。体格も筋肉量も体力も、いずれも限界があり、女性のそれは男性のそれよりもはるかに低い。

淀みなく彼女に距離を詰め、木刀を振り下ろす。一振り、もう一振り、絶え間なく打ち下ろす。

たとえ稽古であらうと容赦などしない。浅く呼吸を繰り返して、アイリスは辛うじて私の木刀を凌いでいる。

彼女の次の動きがわかる。目線、呼吸、重心、あらゆる情報がそれを示し、そうすれば自ずと自身がどう動けばいいのかもわかる。相手の動きを読めれば、誘導もできる。

アイリスが一度深く呼吸をしたとき、反応がどうしたって遅れるその時に、彼女の腕を木刀で打

ち付け、そして切っ先を胸元の寸先に突きつける。

「やめっ！」

合図の後、木刀が地面に転がる音が響いた。

私には、これだけの才がありながら……

私が物心ついたばかりのころ、その日は嵐の夜だつた。

兄とともに母連れられて冷たい雨の中を走っていた。当時の幼い私にはすべてを理解できなかつたが、果てしない恐怖だけは確かだつた。

剣を手に家を出ていった父のあれほど険しい表情も、賢い母があれだけ取り乱している様子も、わがままな兄がこれほどに口数が少ないことも、どれもこの夜に初めて見た。

走っている先に、地面に転がる赤色に汚れた剣を見た。その奥は、母に遮られて見えなかつた。今思えば子供に見せられるものではなかつたのだろう。

そして私は暗闇の中でそれを見た。それらを見た。闇から現る異形の狼を。私を庇い斃れる母を。落ちた剣を手に取り怒号を上げる兄を。

兄はその異形の狼にがむしゃらに剣を振り、そして返り討ちに遭つた。

私はこの時理解したのだ。どれほどの愛があるうと、どれほどの行動力があるうと、そうして剣を手を取つたとしても力がなければ意味がない。

目の前に兄が落とした剣が転がってきて、異形の狼とそれを交互に見つめていた。

もう何もない。この剣を手取る理由も、手に

取れる理由も私にはない。

狼の足元に父のペンダントを見つけた。

ああ彼も、剣を手にする素質がなかったのだと
思った。

全てを受け入れた私に狼が跳びかかってきたときに、その左目を誰かが切り裂いた。疾く鋭い一閃。自身の右目が凶爪に潰されることも厭わずに私を救ってくれた。その剣の持ち主こそがベルクであり、私の師との出会い。

この時に私は、彼のようにならなければいけないとそう思った。

団長室からの帰り道、既に日も暮れかけているというのに訓練場から素振りの音が聞こえてきた。

ベルクの剣を持ったまま、その音のなる方へ近づく。広い訓練場でぼつんと一人、アイリスが剣を振っていた。

「精が出るな、アイリス」

「ザイツさん、お疲れ様です」

そうして駆け寄る彼女の視線は、私の持つ剣に向かっていた。それも当然か、これは彼女にとっては父の形見なのだから。

「父上の剣、ザイツさんが受け取るようになったんですね」

「私では不満か」

「いえ、むしろザイツさんで安心しました。父上のその剣はなにか特別な力があるわけではありませんが、よく斬れ折れぬ最高の剣だと、生前よく

自慢していましたから。ちゃんと腕のある人に渡って安心しています」

その言葉はアイリスにとって本心であり、偽心であろう。「もし自分がそれを受け取るだけの何某があれば」と、彼女の眼はそういう眼だ。

「私も父上のように、ザイツさんのようになるために頑張らなければなりませんね」

彼女は本来剣を持つべき人間ではない。彼女には才がない。本当であればまだ誰かに守られるべき幼気な少女であり、そもそも将来的にも戦場に立つべき人間ではないはずだ。それをベルクが許したとはいえ。

「明日からの討伐遠征だが」

遠からず、彼女は戦場において命を落とすだろう。剣を手にするということはそういうことだ。

才があればその死期はそれだけ遠くなる。だから、そうでないものが死に急ぐようなことは、無駄死にをする意味はない。

素質のない者は剣を手にするべきではない。

腕も足も華奢で、性別のわりにも小柄で、剣など持たずにペンと本とに向き合う生のほうが良いのではないかと。

だから。

「出立は早い、今日はこのあたりにしてしっかりと休め」

アイリスにそう言い残して私は彼女に背を向けた。

君はここに残れと、冷酷にもそう言い放てたらどれほど良かっただろうか。私はそう決断できない。

かったことを後悔するのだろうか

状況は最悪に近かった。死屍累々、そう言うほかなかった。

我々がベルクを失ったあの戦いの続きは想像を絶する凄惨さであった。

この数の異形の群れに攻められたら一たまりもないことは明白であり、討伐遠征の判断は正しい。同時に、その侵攻に多大な犠牲を要することもまた明白であった。

それでもなおやることは変わらない。私は剣を持っていく。ベルクの剣ではなく私の剣。量産されたその一振りが、今また異形の狼の首を斬り落とした。

彼の剣を使ってもよかった。いや、本来はそこらを使うべきだ。無名の剣だと言われているが、その質は並大抵のものではない、大業物である。ただどうしてか、私にこの剣は手にできないと感じてしまった。

二匹の狼に囲まれる。身体から不要な力を抜いて構え、待つ。風いだ空気の僅かな機微を感じ取る。睨み合いの末にしびれを切らした方が負けるのだ。爪を弾き、牙を籠手で弾き、すれ違いざまに剣を振りぬく。そして勢いそのままに、返す剣にてもう一匹の腹を両断する。

もはやこれが何匹目かもわからない。仲間だったもの、敵だったものを避け、踏みつけ、それでも剣を振るう。

剣を持つ素質が私にはあるのだから、振らなけ

ればならない。家族のため、恋人のため、国のため、そのような大義が私にはない。なぜ剣を手にするのかと問われたときに、私は答えを持ち合わせていない。

ただ、「私には才能があるのだから、剣を持たねばならない」という答えのみがある。

驕りではない。私には確かに剣の、戦の才があった。師たるベルクの下で研鑽を重ね、技量だけであれば彼に並び立てる自負がある。

また、狼が立ちふさがる。構え、素早く駆け出して順繰りに屠っていく。

だがそれでも、いまだに彼に追いつけない。理想そのもだった彼になれない。どれだけ追いかけても、届かない。一体私に何が足りないだろう。

そしてようやく見つける。因縁の、かの隻眼の狼は変わらないの巨躯を誇っていた。その姿を見て、全身が沸騰するかのように血が巡る。激情が逆る。

ああ、あいつはどこまで考えているのだろう。果たして私を甚振る気が微塵でもあるのだろうか。

目の前の狼は、副団長の左腕を喰い千切っていた。いつかの瞬間の再現。忘れるはずもない。

であるならば、あいつが次にすることはわかっている。わかっているのだ。

私の手には剣がある。私には才がある。だから、今行かねばならない。まだ息のある副団長を助けなければならぬ。

あいつの動きが分かるからこそ、私はまたしても動けなかった。敵わないと、理解した。

ああ、また同じだ。

剣を手にするのは容易いことではない。人殺しの道具なのだから。

人殺しの道具を手にするのは容易いことではない。それは「己も殺される」ということなのだから。

己も殺されるとわかってなお、身体を動かすことは容易いことではない。その覚悟が足りないものは、きっと剣を手にするにふさわしくないのだ。

では、覚悟があれば。

副団長に振り下ろされた爪が弾かれる。華奢で小柄で、未熟な剣だとしても。彼女は剣を振るつた。

彼女とて、自身の技量をよくわかっているだろう。相対する存在との力量差が分からぬほど未熟ではないだろう。自身が敵わぬことを理解しているだろう。この場において最も未熟である自身を晒せば、すぐそこに死があることを本能的に察知できるはずだ。

その証左に彼女の呼吸は震えている。

だがそれでも彼女は、アイリスは剣を手に、仲間を救わんと駆け出したのだ。

幾度かの攻防を凌いだ彼女は声を上げる。

「ザイツさん！」

そうアイリスに呼ばれて身体が動いた。彼女の力量ではあと数刻しか持たない。ならば私が動かさずにどうする。

駆け出し、剣を突き出す。恐ろしい反応速度であった。躲され、追うように剣を振り、それも爪で弾かれる。

「アイリス、よくやった。まだ動けるな」

隻眼が我々を睨んでいる。……来る。

「合わせる、好きに動け！」

小柄なアイリスは私の予想以上に機敏だった。隻眼の狼の爪と牙を私が弾けば、彼女は動ける。アイリスの動きをみて、そうして動く隻眼の狼の動きを、そのどれもが分かる。

あまりにも細い勝機。一度でも選択を誤れば、あるいは向こうが冴えた行動をすれば、おそらくアイリスの命はない。そして私一人ではこいつに勝てない。

剣戟を重ね、一刻の隙を見た。アイリスの剣がかの狼の腹に真つ直ぐ放たれ――

――彼女の剣が折れた。

とつさに彼女を庇い横跳びに避ける。果たしてそうなることが分かっていたのか、隻眼の狼は避けもせず爪を振り下ろしてくる。

「ザイツさん……!?!」

左、肘より先の感覚がない。その爪に、切り落とされたのだ。

「アイリス、私の背にあるこの剣を取れ」

「でも……」

「この剣は本来お前が使うべきだったのだ。折れず、よく切れる、父上の大業物だ。あいつの毛も容易く斬れよう」

彼女は逡巡を振り払い、私の背からベルクの剣を抜き取り、構える。

剣を持つには素質がいる。誰にとて持てるものではない。ではその素質とは何か。臂力か、体力

か、賢さか、剣技か、いずれとて欠けてはならないが、そのどれもを持ち合わせようとも足りぬものがある。

臨死の場において、生き物として根源的にある恐怖を受けてなお屈せぬ、覚悟とも言い表せよう精神こそ、剣を手に取る者に必要な素質であるのだと理解した。

私はそれを持ち合わせず、アイリスがそれを持つことも。

左腕は痛まない。まだ、辛うじて痛まない。

「すぐに決着を付ける。長くはもたない、腹を決めろ」

向かいあう隻眼もまた、こちらの殺気を感じ取ったのか構えなおし……来る。

剣を振りぬき爪を弾く。アイリスの剣もまた爪に弾かれる。幾度か火花が散り、これまで見えなかったものが見えた。

アイリスの横振り。それを弾かんとする爪を、私の剣で弾きとばす。そうすれば本来私に向けられる爪は、身体で受ける。

これならば届く。

アイリスの剣は、彼女の父上の剣は、隻眼である異形の狼の首に――

才なき者よ。されど覚悟を持つ者よ。剣を手に行ける人間とは、そうなのだ。

コメント

「才覚」というものについて、「才」とは無論才能のことでしょう。天賦の、生まれ持った、そういうものです。同時に「覚」とは覚悟のことであってもいいのではないかと思います。例えどのような行いであろうと、選択には覚悟を伴いますから。そのいずれかが欠けた二人のささやかな物語です。あるいは人は自身にないものこそ本来必要な素質であると思ってしまうのかもしれない。

私のこよなく愛する作家は「読んだ方の心に残る物語を書きたい」と、そして私もまたそう思うのです。私の作品に未だそれだけの力があるかは定かではありません。ですがそうは至れずとも、「読んだ方の心を動かせる物語を書きたい」と、尊敬を込めてそう思います。そしてこの作品がそうあることを願って、そうあれば嬉しく思います。